

第一期

第十四回 (初版) (無料)

## 粗忽長屋

奈良 敏行

(定有堂 主人)

## 粗忽不通

本の「オトーペ」

学びあう人々のため

2026.01.10 定有堂書店 発行

粗忽長屋

条文解釈と放漫財政

日々是雜言 (だいひそくん) 12

幽靈が消えた理由

生れ延びる (せいねんびる) 一〇一六

「J」れへじよ田畠

Talkin Quiet, Say Something

本を作る側から (34)

論語について (8)

世界終末戦争は世界を内包する  
おじの話

猫のいないクリスマスなんて

Jelly

編集後記…

奈良 敏行

岩田 直樹

萩原 俊郎

板野 田香

おぎはしりさく

鳥居 貴彦

高木 善祥

村瀬 謙介

小原 修治

古賀 啓三

ムラカミヒロコ

三浦 永理

あきの素生  
アリマリア

十一月六日(土)に「トバジン館」で伊藤比呂美さんのトーク会があった(110115)。野の花診療所の徳永進医師の会だ。夕方六時から伊藤さんは囲む夕食会があり、お招きにあずかった。伊藤さんは人の「死」に関心が深く、徳永先生にたたみかけるように質問をあびせかけていた。

わたしはほとんど口を差し挟む余地もなく黙々食べるばかりだった。最後に何か一つくらいは言わないと食い逃げになるかと思い、体験談を一つ簡潔に語った。新聞の「おくやみ欄」は、習慣的に毎日通していたのだが、病を宣告されて後、怖くて見られなくなり、そこだけ隠すようにして紙面をめくるようになった。「どうして?」と伊藤さんに聞かれ、「ひょっとしたら自分の名前が出ているかも知れないから」と答えた。そこに名前が浮き上がるのは確実な出来事だと思えたからだ。しかしの恐れをうま

く説明することはできなかつた。

伊藤さんは、じつと目を見て、それは落語の「粗忽長屋」だと教えてくれた。同じ長屋に住む八五郎と熊五郎という仲良しがいる。ある日八五郎が行き倒れを見て、熊五郎だと思い込む。急いで長屋に戻り、熊五郎に、「大変だ、お前が行き倒れで死んでいる」と告げる。粗忽な二人は死体を引き取りに行く。そういう奇妙な話だ。しかし、なにがあつても不思議はないという気がする。「死」の周辺ではあり得ないことが起つる。

もう一つ、「死」を見て元気が出るという話をした。県立図書館の一階閲覧室によく通うのだが、ある時、足許の一番下の棚に大きな本があるのに目が留まつた。『ベトナム戦争の記録』という写真集だった。その中に炎に包まれるベトナム僧の姿があつた。路上の十字路でガソリンを全身に浴びた焼身自殺の姿だつた。

全身は炎に包まれているが、顔の部分だけはまだはつきりと残つてゐる。両手を胸の前で合せ、顔の表情はおだやかで微笑んでゐる。背筋は真っ直ぐに伸びてゐる。この「微笑み」が気になつた。図書館に行くたびにその頁を開いてみた。

そうか最後はこのように微笑めばいいのか、と思つた。会食での話はそこまでの説明で終わつた。

「焼身自殺」という意志の力に圧倒される。「死」の周辺にはありえない物語がたくさんある。最近はそういう類いのノンフィクションを読んでゐる。佐々涼子さんの『エンド・オブ・ライフ』などだ。京都の診療所の終末医療を七年にわたり取材する。親しくなつた看護師のチーフも死を迎える。そしてやがて著者も最期をとげる。ありえない話がいっぱいだ。

ベトナムの「焼身自殺」の写真に震撼した作家がいた。ちょっとした事故で自分も油をかぶつたことがあつたらしい。とても「微笑む」どころではなかつた。この僧は十五分で後ろ向きに焼け倒れるまで、確実に五分間は微笑んでいた。信じられない話だ。作家は燃えているのは自分だという奇妙な想念に取り憑かれ取材を始める。そして『焼身』という本を残す。

『ベトナム僧が燃えていた。（略）僧は火柱の真ん中で、すっと背すじを伸ばしたまま瞑想の姿勢で坐りつづけている。』

『ふるえがきた。誇らしかつた。噴きあがる炎が、まつたく異なる精神のかたちに見えた。』（宮内勝典『焼身』）「異なる精神のかたち」がここにあつた。わたしも、こんな人がいるんだと、背筋が伸びる思いがあつた。作家はこの「異なる精神のかたち」に言葉を与えようと現場を訪

れ多くの人に話を聞いた。

作家が、わたしが、ともに得た結論は「焼身供養」という言葉だった。」の炎の十字路にはだくやんのひとが詰めかけていた。誓願つていた。僧は別れに際し、「んな」とを告げる。身体が前向きに焼け倒れたら、わたしたちに未来はない。しかし後の回軸に焼け崩れた心未来はきっと開ける。そして微笑みながら後ろ向きに焼け倒れた。

『焼身』の探求は、入口は「自殺」で出口は「供養」だった。供養には何語的・概念的な支えがある。ベトナムの僧たちは「わが身を焼く」とは、大乗仏教においては禁じられていない」と云う。その供養の概念は「法花経」にある「心」の概念を共有し炎をとり囲んで人々は祈るのだ。「死」の周囲にさもありと云う、粗忽で奇妙な、つまり論理を超えた物語があるのだ。そして物語が未来への希望として紡がれるところに驚く。

2025.12.12.

奈良敏行+三砂慶明  
『町の本屋とこう物語』

奈良敏行+三砂慶明  
『町の本屋とこう物語』  
作品社 2024



作品社 2025



ベトナム戦争の記録 繩集叢書  
『ベトナム戦争の記録』 大田書店 1988

佐々原子『H.H.・ホア・ハイ』 集英社文庫 2024  
鈴内勝典『焼身』 集英社 2005

# 「これつてどうなの？」——条文解釈と放漫財政

岩田 直樹

(再解釈本舗・「読む会」講師)

昨年一〇月から週一ペースで定有堂書店ホームページに福本和夫論を連載している。一八九四年生れの人物の事績であり、一九四五以前の日本がどのような状況だったかを必要に応じて調べながら書くことになる。

いろいろと参考文献を読んでいる中で、「これつてどうなの？」と感じた二つの例を挙げてみたい。

まずは、治安維持法。一〇一五年は施行一〇〇年にあたる。日本史教科書で教わった記憶はあるが、今まで法律の内容や執行状況を調べたことはない。

中澤俊輔『治安維持法——なぜ政党政治は「悪法」を生んだか』(中公新書、一〇一一年)と荻野富士夫『検証 治安維持法——なぜ「法の暴力」が蔓延したのか』(平凡社新書、二〇二四年)を読む。中澤は成立過程を、荻野は運用面に重点を置く。中澤本、荻野本の順に読めば概要は掴める。荻野本が朝鮮、台湾、満洲など「外地」での運用を詳しく記述していることは大きな収穫である。以下の議論は両著作とは無関

係な妄想である。

治安維持法はわずか七条からなる短い法律である(読み易さを考えて引用は片仮名を平仮名に直す)。

第一条には「國体を変革し又は私有財産制度を否認することを目的として結社を組織し又は情を知りて之に加入した者は一〇年以下の懲役又は禁錮に処す。前項の未遂罪はこれを罰する」、第二条には「前条第一項の目的を以て其の目的たる事項の実行に關し協議を為したる者は七年以下の懲役又は禁錮に処す」とある。一斉検挙(三・一五事件)が行われた一九二八年の治安維持法改正緊急勅令では第一条の最高刑が死刑となつた。

国会の議決ではなく勅令によつて死刑にしてしまう裏技には驚く。「実行」に移さなくても「協議」しただけで懲役又は禁錮になるのであれば、居酒屋談義で政権批判(結社による協議?)をしようものなら検挙されることになりかねない。実際、俳句会や詩人クラブも弾圧されたという。

最も引っ掛かったのは「そもそも國体とは何か」という根本問題である。明確な概念の定義がなされなければ法律で「國体」という語を使用することができないはずだ。

文部省は天皇機関説を排撃した國体明徴運動を受けて、一九三七年に副読本『國体の本義』三〇〇万部を全国の教育関係者に配布した。そこには「大日本帝国は、万世一系天皇

皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ。これ、我が万古不易の国体である。」と書かれている。この表現から「国体」の具体像が想像できるだらうか。

丸山眞男は『日本の思想』(岩波新書、一九六一年)で「国体」を支える大日本帝国憲法の「輔弼」概念を取り上げる。「輔弼」とはつまり、統治の唯一の正統的源泉である天皇の意思を推しはかると同時に天皇への助言を通じてその意思に具体的な内容を与えることにほかならない。「無限責任のきびしい倫理は、このメカニズムにおいては巨大な無責任への転落の可能性をつねに内包していた。」「無責任の体系」の完成態である「無構造の構造」=「國體」は否定的な同質化作用(異端の排除)のみに力を発揮する。

よく引用される箇所である。丸山らしい晦澀な表現だが、要は「國体は何なのかよくわからん」と言つてゐるに過ぎない。

もう少し掘り下げてみよう。第一条には「私有財産制度を否認する」とある。となると、第一一〇回で取り上げた権藤成卿のように大化の革新(公地公民制の始まり)を理想社会と見做すことは第一条違反となる。権藤といえば、尊皇主義の権化ともいふべき人物だ。

治安維持法の主たる対象はわずか数百人ほどの共産主義者であった。条文を字義どおりに読むと、共産主義者よ

りはるかに多い熱烈な國粹主義者も特高(特別警察)が検挙しなければならなくなる。これってどうなの?

紙幅が尽きそうだ。第二の一例は戦時財政である。

小野圭司『太平洋戦争と銀行』なぜ日本は「無謀な戦争」ができたか』(講談社現代新書、二〇一五年)は類書がほとんどない分野を扱っている。サブタイトルは「なぜ日本は「無謀な戦争」の後始末ができたか」とすべきで、敗戦直後の満洲、台湾、朝鮮、樺太などの銀行家たちの奮闘ぶりを描いている。

本書が扱う興味深い事実は多いが、驚愕したのは戦時財政のいい加減ぶりである。昭和一九年度の戦費は対GNP比九九%だったが、「外地」の現地通貨で支払う抜け道によって日本政府の支出は対GNP比五三%まで下がったこと。臨時軍事費特別会計(昭和一二年以降)の合計一一〇〇億円は昭和一九年GNPの一・五倍だったこと。

対GDP比一〇〇%超の借金を抱えているにもかかわらず、プライマリーバランスや財源を全く考慮せずに放漫財政を続ける二〇一二六年の平時財政と比べると、どちらが戦時財政なのか頭が混乱してくる。

ひょっとして今は戦時財政? これってどうなの?・?

## 日々是雑言（ぞうざん） 12

萩原 俊郎  
(倉吉市在住者)

曰びる気になることを、つれづれなるままで。

稀有(けう)な人

高市ネタが続く。自分でも「自家中毒」を起しそうで今回で止めにしたい(笑)。『トランプにたしなめられる稀有な人』。最近、思わずうなつた投稿の川柳である。台湾有事で米軍が「出る」とも言つていないので、「出る」と言つてしまつたあの高市首相の国会答弁。

「存立危機事態」は、①中国が海上封鎖、台灣侵攻に出る②これに対し米軍が軍事介入③中国は日本国内の米軍基地に反撃④「領土の存立が危うい」として自衛隊が出動一というプロセスが前提なのに、高市は「台灣の有事は日本の有事」という安倍の遺した言葉(ただし)の言葉は彼の首相退任後)が頭にすり込まれているのか、米軍が関与する②③を見事にすつ飛びしてしまった。

トランプはあわてて北京と東京に電話し、高市に「事態の沈静化」を求めた。つまり「米中間の大切な交渉を前に、頭ごなしに勝手に騒ぐな」というわけだ。

似たような事例は続く。「日本も核を持つべき」。官邸筋の高官がもらしたオフレコ発言に、米国務省がたちちに反応した。「(被爆国)日本は核不拡散の世界的なリーダーである」。こんなことを米国に言われるとはね。そして「核抑止力はわれわれの仕事」と釘を刺した。

そろそろ米国も、高市政権が「リスク一なもの」に映り始めているかも知れない。日米同盟のためには安定した保守政権を望みたいが、靖国神社に象徴される復古主義的な保守勢力には共和、民主いずれも警戒心がある。

それ以上に米国が「リスク一」に感じているのは、むしろ高市政権の経済、ばらまきの「積極財政」だろう。円安でトランプの嫌うドル高が進むだけでない。万一、米国債の最大保有国の日本が財政破綻し、それを売るような事態になつたら米国債は急落、米経済は大打撃を受ける。

米国は国益に敏感だ。そのためなら相手が同盟国の首脳だろうが容赦しない。え、そんなことできるかつて?

角栄もはめられた

「ムネオハウス」で失脚間もない鈴木宗男氏を、不謹慎ながら新聞社の講演会で招いたことがある。1時間半では足りず別会場を借りて延々3時間、熱弁をふるつた。

一番力が入っていたのが「私は米国にはめられた」という持論。「ロシアとの交流事業、アフリカ諸国への支援。米国に頼らない独自の多極外交をやろうとしたのが気に障ったんでしようなあ」。途端に、政治とカネの問題、外務省や北海道開発に絡んだ収賄疑惑が次々浮上。「疑惑のデパート」と名指しされ、政界を一時追われた。

「はめられたのは田中角栄さんも同じですよ」と彼は付け加えた。中国で兵役体験のある田中元首相は、国交回復では米国に出し抜かれたが、明治大卒の周恩来との信頼は厚く、米国以上の『熱烈友好』を築いた。米国が手を焼く中東産油国との交渉も得意とするところだった。

「ロッキード事件は米上院の公聴会(コーチャン証言)が発端。日本では権力の絶頂だった角栄さんも、完全にはめられた」と鈴木氏。いささか『陰謀論』めくが、世界中で政治指導者の失脚やクーデターを企ててきた米国ならば「むべなからん」と彼の講演に深くうなづいた。

議員の数が減って、「ああ、これは良くなつた」と思える議会があつたら、どうか教えて欲しい。

私が初めて取材した頃の倉吉市議会(1989年)の定数は「30」、それが今は「17」。半分近く減ったのに今年の選挙は無投票になつた。36年間に議員報酬は増えたが、議会に全く「熱」がない。

石破前首相が、自民と維新の議員定数削減法案に「納税者、主権者の代表は少ないほど良い」という考え方は間違つていなか」と述べたが、まさに正論だ。それどころか、この削減法案には「隠された意図」がある。

大阪府議会は、私が取材した2000年当時は定数「109」。ところが「身を切る改革」を叫ぶ維新の台頭で2023年には「79」まで減つた。すると何が起きたか。各選挙区の定数が減ると、勝つのは第一党の維新ばかり。2011年に110議席中57議席(占有率52.3%)だった維新は、2023年には議席数こそ2つ減つたが、79議席中55議席(占有率69.6%)、なんと議会のほぼ7割を占める「一強体制」を築いたのだ。

毎日新聞の試算では削減後、自民・維新は若干議席を減らすが「安定過半数が確保できる」と出た。「身を切らない改革」のトリック、やめゆめだまされてはいけない。

「身を切らない改革」

# 幽靈が消えない理由

板野 田香

(薬剤師・岡山県在住)

最近、Tempalay(テンパレイ)と、うバンドの曲ばかり

聴いている。どうか、しかし、聞いてないので、車に乗るたびにサブスクのプレイリストが同期され、気づけば車内は彼ら専用のジュークボックスと化してしまっている。なかでも特に好きのが『Ghost World』という曲。理由はうまく説明できない。ただ、強く惹かれるのだ。

『Ghost World』は、Tempalay の4作目となるフルアルバム『カーストアルバム』に収録されている曲で、そのジャケットはマジカルアートの技法で、『見えないモノと見えるモノ』が重なりあつたデザインとなつていて、作品全体を通して両義的な感触が通底しているのだが、なかでも『Ghost World』は、聴くたびに寂しさや安堵、どうしようもない郷愁を呼び起す。何故だろうか。

音楽的に見れば説明できる要素もある。例えばストリングス。弦楽器の持つ搖りがけ、感情に陰影を与える装置

ひとつもよく知られていて『Ghost World』でも効果的に使われている。だがそれだけではない。とりわけ異質、かつ印象に残るのが「ポー」と響く抑揚のない音、サイン波である。サイン波は、单一の周波数だけを持つ人工的な音であり、自然界には存在しないと言われている。それがストリングスと重なつて、記憶の奥で鳴つているような印象を抱かせる。でも懐かしさを感じるのに、思い出せる過去が見当たらない。いつだい何と共鳴して居るのか。

最近、Tempalay を語れる人がいないので、その日私は ChatGPT へ「Tempalay イイよね、神だよね」(庄一)というような話をしていた。『と、この曲で感じた郷愁や寂しさについて質問してみたのだ。そして一つのキーワードが浮かび上がった。「Ghost World は不在が存在している曲なのだ」

サイン波として鳴り響く不定形なもの。ラストのサビ前でそれが緩やかに沈んでいき、盛り上がるメロディラインの上に、ヒントロピーの少ない「あゝ」という歌詞が載る。意味を内在するはずの言葉が意味を語らず、かえつて無数の解釈や感情をひき立ててくれる。

コンテンツは異なるが、同様の感覚を抱いた作品がある。アンドレイ・タルコフスキ監督の映画『ノスタルジア』だ。奥行きのあるテーマや質量的均衡のとれた画角、語る要素は

多く存在するが、この作品で最も強く記憶に残ったのが、最初のモノクロのシーン（寺院の中に主人公の故郷が内包されている不思議なシーン）である。色彩を失ったはずの世界が、鳥肌が立つほどに鮮やかで思わず息をのんだ。その感情に対する答えが、タルコフスキイ自身の映画論を語った

『映像のポエジア』の中についた。

「どのように奇妙に思われようと、われわれをとりまく世界に色彩がついているにも関わらず、モノクロ・フィルムのほうが、その世界のイメージを、心理的な、自然主義的な、かつ詩的真実により近い形で再現するのだ」

「芸術は人生そのものと同じように多次元であり、不定のものであるのだ」

「私はロシアの家を、イタリアの寺院の壁の中に置いた。（中略）これはいわば主人公の内的状態の模型であり、彼に以前のように暮らすことを許されない、彼の意識の分裂の模型である。あるいはおそらく逆に、これは彼の新しい統一体なのだ。つまりこの新しい統一体は、トスカーナの丘陵地帯とロシアの村を有機的に内包しているのである」

つまり、映画とは意味を明確に説明するものではなく、言葉にならないものを、そのまま残すための器だと述べている。そこでは、不在や無形のものも排除されることなく保たれ、現実と幻想、希望と絶望といった対立要素も、従属性も

なくただ並列に存在する。と同時に、受け手が解釈するための余地、いわば空白も意図的に残されているのだ。意味を確定しきれないこと。不在が存在すること。複数の要素が同じ質量で扱われていること。そこに確かに同質性がある

た。

きつと、の態度に惹かれたのかもしれない。変な話、私にとって悲しみやトラウマは「乗り越えるべき対象」であると同時に「愛着を抱く対象」でもある。悲しみは悲しみとしてそこに在り続けることで、世界の密度を保つものだ。私にとって幽霊とは、かつて何であったかを提示する存在ではなく、沈黙や気配といった無形のものが、感覚として立ち上がり構造のことだ。だから幽霊は消えない。

この「感覚的構造としての幽霊」をテーマに、新しい小説が書けないと最近考えている。外的 세계は何も変わらないが、内面での幽霊の定義が変わることで主人公が救われる物語。悲しみを悲しみとして抱えたまま生きていく物語。前のコラムで述べたかも（てないかも）知れないが、私は自分自身のことを書くのが大変苦手だ。もしかすると、これから書こうとしているものが、初めて自分を語るものになるかもしれません。

# 生き延びるー10ー16

おがはら きえ

(陰日)

過去が追い上げてきている。

「思い出」と言われていいような出来事を「じこ」しく忘れ、母から「そういえばあんた昔さあ」などと子どもの頃の話をふられても全く覚えがなく、「そんなに忘れられたやつたかいがなさすぎる」と育て甲斐のなさを嘆かれたこともある。

どうしてる?」「どこの大学に行つたんだつけ?」という話の振り方しかできず、周りは当時誰と誰が付き合っていたとか、担任に「こんなこと」言われたとか、思い出話に花を咲かせていたが、それらは記憶の呼び水とはならず私はただただ聞き手にまわるしかなかつた。

昔のことだから忘れているのかといえばそうでもなく、先日は映画を見ている最中に「あれ? この人の名前なんだっけ?」とすでに作中で何度も呼ばれていたはずの主人公の名前が思い出せず青ざめた。脳内の「覚えなくとも生活に全く影響ない」ものの切り捨て方がえぐい。ちがう、私は忘れん坊自慢をしたいのではない。記憶がないということは積み上げがないことだ。

数年前、高校の同窓会に参加してみた。卒業以来、付き合いが続いている同級生は皆無、再会しても会話がはずみそうな予感が全くしないにも関わらず、変わり映えのしない単調な日々の中にハプニングを起こしてみようというチャレンジ参加だった。会の数日前から「せめて顔と名前だけは」と卒業アルバムを引っ張り出して予習(復習?)に励んだ。幸い顔写真を見ればクラスメイトとしていたという記憶はあったが、具体的なエピソードは思い出せぬまま当日を迎えた。元クラスメイトたちは顔を合わせると私の名前を呼んでくれて、こちらも予習(復習?)した甲斐あって堂々と相手の名前を呼ぶことができたものの、「今

二〇一二四年の秋に定有堂教室「読書室ビオトープ」の参加者数名で文芸サークル「らくだのじぶのビオトープ」を結成した。全くのプライベート、収益が出るわけでも社会貢献するわけでもない。でも、昔から漠然と望んでいた「作品と呼べるようなものを書く」とが叶えられそうで参加した。アイディアがないこと、時間がないことを言い訳にして延々と放置されてきた願いだが、社会的促進と評価懸念が働いて見事エッセイ『迷妄蒙昧』とサークルの文芸誌『砂塵』に小説『遡上』を書くことができた(sheep sheep booksとエスキースで販売中)。

両作とも枚数としては少ないものだが、それでも書いている最中は自分の知識や経験の無さ、感受性の低さなどを嘆いた。またサークルのミーティングをしたりメンバーの作品を読むなど他人と並ぶことで自分に欠けているもの無いものをますます思い知らされた。

なんで今までもつと積極的に経験したり勉強したりしてこなかつたんだーと自分を叱責したい気持ちもないではないが、何か新しいことをやろうとしたときに懸念される周

りとの衝突や失敗、それらの回避行動が今という結果なのだということはわかっている。さらになぜそんなに避けてきてしまつたのか掘り下げて考えてみると、幼年時や学生時代の失敗、挫折、恥、人から言われた心無い一言に行き当たる。そして冒頭の一文に戻る。人生の折り返し地点といつていよいよ年齢になつたが、ここにきて俄然清算できていない過去が魑魅魍魎と化して迫いかけてきている。切り捨てたつもりが諦めたつもりが、忘れていたかった。私は漫然と時間を消費して何一つ仕事を成し遂げていないではないか。

それ、かくして『「自分の死を賭して何か重大なことを成し遂げること』を称揚する悲劇的かつ英雄的な思考が誕生』したと紹介している。何か一つのことをやり遂げなければならぬフレッシャーの元凶は、いつだつたのか！と思つたが、この本ではハイデガー自身の思想とは区別して「ハイデガー主義」と呼んでいる。思想つて、それを提倡した本人の意図を超えて他人が都合よく解釈していく」とよくある。

そしてこのようなハイデガー主義の心のあり方を「垂直方向」と表し、対する横のつなぎりを「水平方向」と表して、その一例として社会学者の上野千鶴子を紹介している。上野は『生き延びるための思想』(岩波書店)で『ピロイズムは女のと/or、フェミニズムの敵だとずつと思つてきました。フェミニズムって、やっぱりダサくて日常的で（笑）、「今日のように明日も生きる」ための思想なんですね。じゃないと子どもを産んでいられない。』と語っています。

そう、私はまだ今の倍生きる、ことを視野に暮らしていくなければならないのだ。

定有堂教室「ドゥルーズを読む会」で松本卓也著『斜め論』(筑摩書房)を読んだ。本書ではハイデガーの『存在と時間』を由来として、ひとは「死を意識することによつて、自分が本当にやらなければならないことに田観める」

# ノギンじょ曰記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

が身体を洗っているのが見える。ちょっと久しぶり。広いお風呂で話していると声があちこちに反響する。女湯の方でも何やら盛り上がりっている声がする。身体を流す水の音。テレビでは芸がなにか食べている。低く小さく歌い出すおじいちゃん。いろんな声や音が響き合ってなんの話をしているのだかよくわからなくなってくる。それでも別にいいのだ。どうせまたすぐ会う。「じゃまた」と挨拶して先に帰る。

歩いて行ける範囲に二軒の銭湯があるといふことがとても贅沢なことだと最近になってよく思う。R温泉は脱衣所が広い。浴室も広いし湯船も広い。よくしゃべる大学生の三人組とかがいても全然気にならない。泡風呂がぬるくて大変よい。息子は水風呂が気に入っている。S湯は最近綺麗になつた。ロッカーの戸がガラス張りで、大きなソファがある。奥のおおきな薬湯がぬるくて大変よい。息子は水風呂が気に入っている。風呂上がりには「幽遊白書」を読んでいる。コンビニで売ってるタイプのペーパーバックのやつ。毎回一話から読み始めるので全然終わらない。それでも一生懸命読んでいる。

同じ町内にライブハウスがある。正確にはコーヒーハウスと名乗っている。酒蔵を使った店内は独特の音響らしい。何度も行っているんなひとの演奏を聴いたがなにが独特なのかはいまだによくわからない。ほかのライブハウスに行くことがないからだ。「ハツチエルさんいいですよ」と言われ息子を連れいくことになった。いつもより広い店内で子どもふたりはのびのびしている。ドラムがカツコよかつたらしく自分も習いたいと言い始めた。やりたいことはやればいい。きつかけばほどにあるかわからない。

昨日のライブではギターを抱えた人見知りの男性が、「新曲です」と言ってネコとカメとこたつの歌を歌っていた。ネコのうえにカメがよじのぼって、カメのうえにネコが飛びのつて、もうどうしようもない、と歌つていた。おでんをつつきながら音を聞く。どこかで見たことのあるひとが舞台に上が

る。金属的な音が流れ出す。シンクのライトルーム「一ホール。演奏が終わってからピゲのおじちゃんが「あのひと東京ドームとかでやつてゐるんですよ」と教えてくれた。」のくんに住んでるらしい。有名なひとだから見たことがあるのか、よくそれ違うから見たことあるのか。近所のライブハウスではその境目がぼんやりしている。

近くのマンションに住むKちゃんが「引越すんですよ来年」と虹に出した。もう誰も住んでいないおじいちゃんの家が近くにあるという。全部片付けなければならない。本もあると、うのちよつと覗かせてもらつた。電気も通つていなくて、家の間でも薄暗い。台所には食器や調味料、あと酒。一階にはスーツや着物、布団。お歳暮やお中元が包みを開けられないまま残つていて。薄暗いのは明かりがないからだけではなかつた。全てのモノがしつかりホコリを被つて黒っぽいのだ。三十年前に生活が止まつたままの家。「それ全部片付けるつてねえ…」Kちゃんは途方にくれて、途方にくれるのを見近に見るのはあまりない。これが途方に暮れるといふことかと、大量の暮らしの残骸を前にして思つた。客間の人形類はOさんに古道具の市場に出してもらつたらどうだらう。ウイスキーはHちゃんが何とかしてくれるとかもしない。Hちゃんが頼んだ

「何とかなるんじゃない。モノを田の前に並べてみんなひとの顔が浮かぶ。わなと声をかけてみます、と約束してしまつた。まずはお金に変わりそうな古道具とお酒から、次に無料で処分できるやうなもの。最後にお金を払つて捨てなければいけないもの。一ヶ月以上かけてちよつとずつ手を入れていく。屋根裏から予期せぬレコードが出てきたり、室外機が空中で宙ぶらりんになつたりしたが家は少しずつ広くなつていつた。棚の奥から出てきた古いラブレターの宛名は親戚にはいなじひの名前だった。棚をのけると窓が開いた。南向きの小さな庭には何本か木が植わつていて。「あれはおじいやつたと思うんですね、ほんでそのよ」がおばあかなど。だいぶ弱つてゐるけど」と木を指差しながらKちゃんがいつた。家は来月には取り壊されるといふ。庭には新しい木を植えるのだらうか。

開風社待賢アツクセンター

TEL 602-8125

京都府上京区大宮通櫻木町上  
菱屋町80-18

080-3166-1385

Info@kaiifusha-books.com  
<http://www.kaiifusha-books.com>

# Talkin Quiet, Say Something

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

んが楽しそうに働く姿がとても印象的だった。

\*

十一月九日、山陰秋の本まつりに出店。三回目となる今  
年は島根県の邑南町での開催だったので、朝五時過ぎに出  
発し、四時間ほどかけて到着。(ちなみに今回は運転好きな  
妻に車を出してもらいました)

所用で南部町のキナルなんぶに行つてきた。図書館を核  
に、歴史資料館・パンやジエリーが食べられるカフェスペー  
ス」「ワーキングスペースもある複合施設だ。

元同僚のWさん(女性)が働いていたので、地域の人たちがどんな  
風に利用しているのかを色々と教えてもらひつた。

図書館内の緑のじゅうたんが敷かれていたところは「お  
しゃべりOK」というルール。平日の昼間とこくともあり  
利用者は少なかつたが、友人同士と思われる年配の女性が  
のんびりおしゃべりをしていた。

施設をひととおり案内してもらい、帰らうとしたタイミ  
ングで、隣接する小学校から子供たちがワーッと入つてくる。  
普通の図書館なら「シーッ!」と注意されると思われる  
が、周りの人は気にする様子もない。ここでは、の賑やかさ  
がスタンダードなのだろう。

また、出雲在住の元同僚と、松江在住の元部下も来てく  
れた。ゆるくつながる感覚も大事にして、きたい。

別の会場では、少し前に最新号が発売された『みんなでつ  
くる中国山地』のトークイベントも開催され、残念ながら参  
加は出来なかつたが、こちらも盛況だつたそうだ。

寛容であることが当たり前の場所。「施設の職員さん」で  
はなく、子どもたちにも「〇〇さん」と名前で呼ばれるWさ

「場所としての本屋」はソーシャルビジネスとして認識さ

れつづあると思つうが、ソーシャル＝社会性と、ビジネス＝商売とのバランスを他の本屋さんたちはじつ捉え、どう実践しているのか、話を聞いてみたい。

\*

来年から新しいことを始めようと、色々とネタを仕込んでる。

ひとつは鳥取で活動する方を招くトークイベントで、第一次は昨年鳥取に移住して、こられた平見さん。

映画関連の仕事をメインに、口をやつたりNINEハウスの運営をしたりとあちこちで県かけていたので、移住したきっかけや今どこのことを話していただいた。

いわゆる映画マニアではなく、「」の映像はどうやって成り立つのか知りたい／身につけたい」が出発点で映画を撮るようになったそつだ。これは他の活動でも一貫していて、技術論や身体論の観点からとても興味深いお話を聞くことができた。

1月のゲストはフィルムアート社の編集者・今野さん。文芸書や雑誌など一般的にイメージされる編集者と、アート系書籍の編集者は仕事のやり方も全く違うと思うので、個人的にも楽しみにしてる。

今後は二カ月に一回程度のペースで行う予定。

他にもまだ書けないが、実利を得る「」、利益よりは宣

伝を主眼にした活動、趣味全開のお遊びと、本屋を長く続けるための仕組みを地道に続ける一年にしようと思つ。

#### 【参考文献】

『アーノルド・ローベルものがたり』エミー・キャスナー 文化出版局

がまくんとかえるへんシリーズの作者の伝記絵本。  
当店にも、「友達に本を貸したけど返してくれないんだよ」と楽しそうに話す九十歳近いお客様がおられます。

『』は本をかりるだけじゃない図書館』藤坂康司  
名古屋での図書館館長を務めた藤坂さんが、図書館での五年間の取組みをまとめたNINE。

#### 【イベントの】案内】

Talkin Quiet, Say Something Vol.2

日時：1月11日(土)十九時～

参加費：一般 千円／大学生以下 五百円

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

# 本を作る側から (34)

村瀬 謙介

(小取舍)

スマートフォンも最新のものに替えた。長年使い続けたiPhone7（化石）からの更新は、かなり遅れた決断だった。前のスマホは、暗所で映らない、OSが古すぎてアプリの更新ができない、バッテリーがすぐに減るなどの不具合が出来ていたので、ストレスが減り仕事の効率化が上がってきた。

机の上には、前々から作りたいと思っていた小取舍のしおりが置いてある。たった一枚の紙切れだが、これまで積み重ねてきた時間や、これから先へと続く道のりを象徴しているようだ、手に取るたびに二〇一五年を静かに振り返る気持ちになる。

振り返つてまず思い浮かぶのは、春に免許を取得してバイクを買ったことだ。昔から村瀬家にはお正月に家族全員が一年の抱負を言って盃を回すという風習がある。二〇一五年の元日に「バイクに乗る」という目標を掲げた。車より安い維持費が実現し、さらには移動の手段が変わると、世界の見え方も変わる。風や匂いを直接感じながら走る時間は、出版という仕事で凝り固まりがちな思考をほぐしてくれた。何度も若桜町のカフェまでバイクでトコトコ走り、仕事兼リフレッシュができた。

出版の仕事の面では、この年は四冊の本を世に送り出した。内田克彦氏が音信不通に寄稿していたものをまとめ再構築した『鳥取あれこれ』、一般流通はしていないが年に四冊ほど五年間制作している私的小冊子をまとめ、初のハードカバーで製本した『ありがとう朋子へ』、映画を見る側に着目しリサーチした映画史『「見る場所」のメディア考古学』、鳥取出身の革命家福本和夫を主人公とし、前田寛治も登場するシナリオ『人間疎外の時代』。結果だけ見れば三か月に一冊という順調なペースだが、その裏側は決して楽なものではなかつた。とりわけ『「見る場所」のメディア考古学』の制作と初挑戦のクラウドファンディング、その刊行イベントの準備に、『人間疎外の時代』の編集が重なつた夏から秋にかけては、正直ヒイヒイ言いながらの日々だった。それでも本が形になり、読者のもとへ届く瞬間が、すべてを報いてくれる。

三月には「第6回 図書館で夢を実現しました大賞」優秀賞を受賞した。毎回著者もテーマも違うのでまず勉強する必要があり鳥取県立図書館を利用しまくっていたのが功を奏したのだが、それでも小さな出版社の歩みが、公共の場で評価されたことは大きな励みになつた。また、倉吉市に開設された鳥取県立美術館のミュージアムショップに小取舎の本を置いていただけたことも、地域の文化の中に出版が確かに根を下ろし始めている証だと感じている。

今回で閉じてしまい残念なのだが、ブックaignとつとりの審査も前回に引き続き関わらせていただいた。毎年開催している鳥取文芸の編集委員も、校正やカラーページ編集などを任せてもらつた。新しい出会いにも恵まれた。梅津酒造さんが作る本へのアドバイザーとしての参加、鳥取鹿

関連の仕事でスタッフとして万博にも参加した。現場で見た熱量（実際に暑かつた）と混沌は、地方から障がい者のアート文化を発信する意味を改めて問い合わせ体験だった。こうして振り返ると、二〇一二五年は忙しさの中に確かに手応えがあつた一年だったと思う（一才児の育児もあつたし）。小取舎はまだ小さな出版社だが、しおり一枚から始まるような、地道で確かな仕事を積み重ねていきたい。二〇一六年もまた、本を通じて人とまちをつなぐ一年でありますと願つていて。

野の劇団が年二回発行する「鳥の劇場通信」の編集。どちらも「本・活字」に携わることが、単独の行為ではなく、人や場との関係性の中で育まれることを改めて教えてくれた。

さてもう一つ。福本和夫の命日である一月一六日に発刊した小取舎最新刊『人間疎外の時代』は、小取舎として最初の二刷が決まり、現在印刷中である。一月中旬には出来上がる予定で、これは出版社代表として素直に誇らしい出来事である。

・ 小取舎の最新刊  
『人間疎外の時代』  
高取正人 著  
本体1000円  
発行 2025.11



## 論語について（8）

小原 修治

（県立高校教諭）

湯梨浜町松崎在住

子游問孝、子曰、今之孝者、是謂能養、至於犬馬、皆能有養、不敬何以別。

（為政篇第一・第七章）

子游孝を問〔と〕ふ。子〔し〕曰〔い〕はく、今の孝は、是〔フ〕能〔よ〕く養〔やしな〕ふを謂〔い〕ふ。犬馬に至るまで、皆〔みな〕能〔よ〕く養〔やしな〕ふ」と有り。敬せずんば何を以〔もつ〕てか別〔わか〕たん。

「孔子の時代では、貴族富人たちは、奴隸、即ち今日で言へば下僕女中、その他多くの使用人を抱へて食物を給与してゐた。それのみでなく、「犬」や「馬」までも飼つてゐて、多くの使用人と同じく、それらに至るまでに立派に食物を与へてゐた。／するとそれらの家では、親に食物を供与する」と、動物に食物を与へることを、同じことに考へてゐたことになります。孔子に於いては、これでは駄目なのだ、親に対しては、物質と次元の違ふ精神的な「うやまふ」敬の心を持たなければならぬ。でなければ、親を動物と同一視したことになつて、親に対するのと、動物に対するのとにけじめがなくなつて駄目であると言はれたのであります」。その

為政篇には、本章も含めて、「孝を問ふ」章が數章続く。うち本章では、子游という弟子が問い合わせ、孔子は「孝」には「養〔やしな〕ふ」だけで無く、「敬する」ことが必要だと答えてゐる。ありきたりの答えのようだが、実は、これは孔子が「孝」に新たな意味づけをしたものであり、この点、加藤常賢の論文「孝の孔子の新解釈」を紐解いてみたい。

上で更に加藤は、孔子が後世聖人と言われるに至った根拠も、「」の物の面から心の面へ転換させて、新しい解釈を与えた点にある」と結論づけている。

心の面への転換。先述のように、為政篇には「孝を問ふ」章が数章続くが、その第五章に魯の国家老だった孟懿子という人物が孔子に「孝」を問うた際、孔子が違「たが」ふ」と無し」と答えたので、それを聞いた樊遲という弟子がその意味を孔子に改めて問うたところ、「生けるには之「これ」に事「つか」ふるに礼を以「もつ」てし、死するには之「これ」を葬るに礼を以「もつ」てし、之「これ」を祭るには礼を以「もつ」てす」と孔子が答えたという話が見えている。ここで孔子は「孝」があくまでも「礼」によるべきものだと述べたわけだが、その「礼」についても、心に目を向けるべき」とを説く章が『論語』には散見する。

例えば、八佾篇の最終章には、「子[し]曰[い]はく、上[かみ]に居て寛なはず、礼を為[な]して敬せず、喪に臨みて哀しまずんば、吾れ何を以「もつ」てか之「これ」を觀ん」とあり、「礼」を実行するには本章に見える「敬」の心が必要であることを孔子は説いている。また、『論語』において心の面を説く最重要語は「敬」よりもむしろ「仁」だが、八佾篇第三章には「子[し]曰[い]はく、人にして仁[ならずんば]、礼を如何「いかん」せん。人にして仁[ならずんば]、樂を如何「いかん」せ

ん」とあり、「礼」「樂」を実行するには「仁」でなければどうしようもない」とを述べている。要するに、孔子は「礼」や「孝」を実行するには「敬」「仁」などの心が必要だと説いているのである。が、なぜ孔子はこれまで心に目を向けるのだろうか。

安田登は著書『あわいの時代の『論語』ヒューマンズ』の中で、季氏篇第十章の「孔子曰[い]はく、君子に九思有り。視には明を思ひ、聴には聰を思ひ、色には温を思ひ、貌には恭を思ひ、言には忠を思ひ、事には敏を思ひ、疑には問を思ひ、忿には難を思ひ、得[う]るを見ては義を思ふ」を引き、「君子」とは心を使うと決めた人のことだとしている。一方、「小人」とは心を使わず、無意識の反応をそのまましてしまう「ふつうの人」のことだとも述べる。

思つに「礼」の力によって「無為自然」に全て事無きを得ていた時代には、人は心を意識的に使わずに済んでいたはずである。が、「礼」の力が弱まるに連れ、心を意識的に使う人が現われた。そこで孔子は、心を自分の得のために使わず、徳のために使うべき」とを説き、それによって「礼」の力を高次元で回復させる」とを考えたのである。

# 世界終末戦争は世界を内包する

古賀 啓三

(米国ミシガン州在住)

バルガス・リョサびくの読者たちの間で、『カテドラル』での対話』と『世界終末戦争』ではどちらがリョサ文学の最高峰か、という論議があり、『世界』を推す者が趨勢である中、大江健三郎は『カテドラル』派であった、という書評、というか半ば文芸コラム記事のようなものをかつて読み、自分もこの論争に加わりたいと『カテドラル』は即アマゾン海外発送で購入したのだが、『世界』は版が絶えており、入手できずにいたのを覚えていてくれた日本の友人が古書店で見つけて送ってくれた。

残念ながら、前述の書評は、大江が『カテドラル』を推した理由を、父と子の確執を主題としているから、と述べるにどまり、これは、大江自身と長男の関係との重なりを示唆しているものと思われた。ノーベル賞作家は、長男の誕生以降『個人的な体験』を始め、自分と知的障害を持つ「ヒカリヤン」との関係を私小説的モチーフとしているが、そ

に父と子の「確執」がひそまれているか? などと思う。あつたとしても、自分の作品の主題との類似性のみを根拠に、「この作品がリョサの最高傑作、と大江健三郎が言うであらうか? 言わないと思う。と、やつとの二つの作品を読み比べる,)ことができたものの、大江が『カテドラル』に軍配を上げた、という記述の説得力は、はなから薄弱(といいか眉唾)であった,)とに気がつかされただけであったが、『世界』を読むべく駆り立ててくれただけでよしとしよう。リョサは、これまでのところ、『ケルト人の夢』、『楽園への道』、『緑の家』、『カテドラル』での対話』、『世界終末戦争』と読み継いでてきており、『緑の家』以後、その過剰な、場面や時系列の錯綜の奔放さゆえ、メモをとりながら読む、というこれまでなかつた習慣を強いるられた。『世界』でもその新しい習慣を踏襲しかけたが、読み始めて直ぐ放棄してしまった。あまりに面白く、とにかく一気呵成に読み了えたい。登場人物のつながりなど細部はもう一度読み直せばいい。その圧倒的なReadabilityについては、僕自身の書くという行為の礎にもなりそうな予感がするので、いずれじっくり読み直し、整理し直す,)となると思うが、この駄文は初読の強い印象だけにもたれて書く。「登場人物のつながり」一つとっても、大長編で、数えきれないキャラクターが登場するのに、導入部、道端で拾った片端の乞食、みたいなのが、後半で登場す

る、政府軍の兵士を殺戮し、切り取った性器を口に咥えさせ、木に吊るす、果敢だが残虐な土民ゲリラのリー・ダーと同一人物であったことに気づき、そうだったんですね、随分立派になられた、と驚く、といったように、単発・偶発的な登場人物、イベントなど皆無で、それらは全て、物語の総体と、有機的、相関的、Systemic につながっている。芸のない言ひ方だが、隅々まで考え方抜かれて書かれた作品である。その完成度の高さが読み手(僕)にもたらす矮小感が読み進めるうえで少し邪魔なくらい。

リョサは、南米文学のことをもっと知ろう、と思つて手に取つたので、ラナン・アメリカ文学のウリである、例えはマルケス『百年』の、美しい町娘が洗濯物のシーツと共に、手を叩きながら昇天する、といった幻想文学性の不在にやや気抜けしたが、二作目、三作目と読み進むうちに、そのようなギミックの不在など気にならなくなるほど小説プロパーの醍醐味に心酔、というか、そういう地域限定的な色物として読まれるべき作家ではないのだ、とせつかく襟を正しかけていたのに、この『世界終末戦争』には、マジカル・リアリズム的エピソードが散見され、そうなればそうならうからで、やつぱり「待つてました！」と大向こうを掛けたくなる。しかし、『世界』の場合、单一の語り手が、レメディオスが干していたシーツと一緒に昇天したと思いねえ、と、これはもう「あつ

た」として信じてもうしかなんですよ、と有無を言わせず押しつけるのではなく、一見荒唐無稽なエピソードが、それは俗信にからめとられた土着人の視点で見聞きした事象、あるいは、似非科学の信奉者である似非科学者、例えば骨相学者が、髑髏に触れて、自らの学識に則つてください、生存時の素性、といったように、作者がでつち上げた「世界」を、もつとも信憑性のある状態で物語の全体性の中に保存するのである。これも緻密に考え方抜くことが要求される作業・技巧である。世界を保存する、と書いて、バイオスファア、という閉鎖生態系エコシステムの実験がアリゾナの砂漠でなされた、ことを思い出した。全体小説という言葉があるが、まるで『世界』と略したことが正鵠を射ていたかのように、『世界終末戦争』は世界を内包した小説である。これはきちんとと考え抜いて、書き切らないと書けないと書けない小説である。自分が作文をするにあたってこのところ自分に課している戒めの一つに、「抽象に逃げない」があると、前にもちよつと書いたような気がするが、芸術なんだから、解釈は読み手の数ほど存在していい、という茫漠さとは対局にある書き方の小説。

## おこめの話

おり、これに挑戦したのかも知れぬ。『うん』ドリルの人は、ぶりを見るにつけ、今も昔も、小学生男子の好みと言うのは変わらないものであるらしい。

正月は 心静かに過ごしたいとお考えの方 これから  
お食事をなさる方は この二ページを飛ばして読まれ  
ることを衷心よりお勧め致します 恐惶謹言

ムラカミヒロミ  
(フライシング・ブックマン)

で、その第一話が「廃人二十面チョ」。探偵には二人の女助手がいるのだが、彼女らは廃人の名前を聞かされて、恥ずかしそうに顔を赤らめるのである。なぜと問うて、「一人の出身地は、鳥取県と広島県で、つまり、この廃人の名前が、同地では、ナニを意味している」というのだ。

「おこめ券」「おこめ券」と、賑やかだ。

最初に、これを見た時、一体誰が付けたんだ、こんな名前、と思ったものだ。他に付けようがなかつたのかね。如何にも座りが悪く、語感もよろしくなく、字面も間抜けである。何より、ある種の言葉を想起させて落ち着かない。米穀交換券とでもしておけば、政府がバラまくにしても、もう少し重みが出ただろうに。

「」で思い出したのが、何年も前の職場での話。

事務室で仕事をしていると、突然、女性職員が「××××ですか、××××ですか」と大きな声で話し始めたので、一体何が始まったのか、と驚倒してしまった。どうやら、電話の相手が喋っていることを復唱しているらしい。

室内には、他にも職員(男性も)がいるのに、誰一人気が付いていない。

慌てて駆け寄り、「悪戯電話だ、切つて、切つて」と、受話器を置かせたのだった。猥褻な言葉を言って、相手に繰り返させるイタ電である。

いさきが古い話だが、永井豪の漫画に『迷惑探偵ニイボ狩小五郎』(何という題名か...)という作品があった。数ある永井作品の中でも、下ネタ満載の一際下品な作品である。当時、とりいかずよしの『トイレット博士』が大ヒットして

当の本人が知らないのは仕方がないにしても、男性職員らが全く気付いていないのが不思議だった。皆、地元出身者で、そこの年齢の者ばかりである。

ひょっとして、××××という言葉は、使用地域がかなり

限定されるのだろうか。

筆者は、小学生の頃、中部の町で、この言葉を知った。(友達が、盛んに使っていたのだ)つらつら考へてみると、東部に帰つて来てからは、ついぞ聞いたことがない。

で、辞書を調べてみる。出でていないのですね、『鳥取県方言

辞典』(森下喜一編、富士書店、一九九九)。そもそも、この種の言葉が殆どない。あるのは、「ひ××」「べ××」だけだ。他の辞典や研究書も御同様。そのような言葉を採録するのは股闇沽券に関わる、と言わんばかり。

ただ一冊、『鳥取県の」とば』(明治書院、一九九八)だけが、男女数種類の語彙を拾つていたが、何だか鳥取の言葉とは思えない節も…。

そうそう、五木寛之のエッセーに面白い話があった。(記憶だけで書くので、細部の相違は御容赦願いたい)

北陸のある城下町に、お偉いさんがやつて來た。夜は、花街で大豪遊。しかし、威張るばかりの品のなきで、洗練された遊びに慣れた芸者からは贅躉を買う。知らぬは本人ばかり、というよくある話だが、オチが振るつてゐる。

さて東京に帰るという日、ホームには地元の旦那衆に頼

まれて大勢のきれい所が打ち揃つて見送りに来ている。

「こゝで、当の大尽、芸者の一人に、当地の別れの言葉を教えろ、と耳打ちし、先の尖つた黒い尻尾の生えた女は、人前では絶対口にできない言葉を教え、チロツと舌を出す。

かくして、センセー、列車の窓から身を乗り出して、そのまま××××を連呼しながらお帰り遊ばした。

『全国マン・チン考』(松本修、集英社インターナショナル、二〇一八)という「マジメ」な本がある。日本全国の、女陰・男根語を丹念に調べ、図らずも柳田国男の「方言周囲論」に一致することを証明した労作である。

これによれば、鳥取県は中部以西が「メ××ヨ」圏で、島根県のほぼ全域と、広島県の大半、山口県の一部までを包含する。そして、県東部は「オ×コ」「マ×コ」圏なのであった。

お後がよろしく、ようや。

(追記)『とつとり言葉』(森納著、一九八八)には採録あり。

流石に医者だけあって、下半身にも目が行き届いている。

## 猫のいないクリスマスなんて

三浦 永理

(三十一歳・女性)

die なんて言葉は使いたくない。pass away。死んだ。  
猫が死んだ。

私が十七歳の春、高校三年の四月の、うちの前の「」  
捨て場にビニール袋に入った状態で三匹の子猫が捨てられ  
ていた。そう考へると世の中には酷いことをする人がいるも  
のだ。私の家族は、その日になるまで、誰も動物を飼うなん  
てことは考えなかつた人の集まりで、正直動物は得意な方  
ではなかつたが、結局人に譲ろうと考へて、間に情が  
移つてしまい、譲つたのは一匹だけで、二匹をうちで飼うこと  
になつた。

彼が生まれてから死ぬまでの、の十三年以上の時間、私  
の人生は大きく変わって、今はイギリスにいる。

親の死に目の中は何度と想像したが、猫のことはそこ  
まで考へていなかつたかもしれないというのが本音だ。人間  
にとっての半年の変化が、彼には二週間ほどで降りかかった  
のだろう。今は、猫も葬儀をして見送る時代になり、私以外

の父母弟はその葬儀に参加した。写真で送られてきた祭壇  
の横には、なぜか「Merry Christmas」と書かれたツリー  
が飾つてあつた。

ロンドンはクリスマスの中だ。冬のヨーロッパ、特にイギ  
リスなど北側にある国々の冬は、長い夜、低い気温、悪い天  
気に特徴づけられている。日光とはいかに大事なものか。日  
照時間の短さのせいか、イギリスではビタミンDのサプリが  
冬の必需品らしい。

そんな冬を乗り越えるのに、クリスマスは彩りを与える。  
クリスマスマーケットは元々ドイツの文化だが、ロンドンの街  
中にもいくつがある。教会のサービス(要是は礼拝)も、クリス  
マスに向けた内容になつてゐる。

六年前、鳥取に移住するまで、クリスマスには母校のカト  
リックのミサに行つていた。そういう意味では、久しぶりに  
礼拝に参加している。英語でのクリスマスキャロルも、何度か  
聞くうちに定番の曲がわかつてしまだ。

私の住む寮は、Royal Albert Hall のボックス席を持つ  
ていて、の間、クリスマスキャロルのコンサートに行つた。ど  
うもこの伝統は一八七一年の開場当時からのものらしく、  
何曲かは観客も歌う流れになる。外に出たらあんなに寒い  
のに、中はクリスマスの文化を楽しむ人で埋め尽くされ、家

族で何度も通つてゐる人もいるようだつた。イギリスも、排外主義の盛り上がりに關しては例外ではない。そんな世知辛い世の中なのに、この中ではそんなイギリスの文化の一部に、よそもののが溶け込んでいる。そんな不思議な感慨があつた。

そんなふうにクリスマスの中で祈る中、私は旅立つてしまつた猫を考える。一緒にクリスマスを迎えられなかつた君。私に生き物のあたかみを教えてくれた腕にうずくまれるほどの小さな君。猫に出会つたことで、触れ合つて愛であることの大切さが分かつた。彼は「蒔きもせず、紡ぎもせずに、安らかに」生きた。(聖歌にあるように。)

「クリスマスというのは、ヨーロッパの人にとっては特別らしい」と考えて思い出したのは、ヴィクトール・フランクルの『夜と霧』にあるクリスマス解放の逸話だ。そこには、強制収容所のユダヤ人たちが、クリスマスに解放されることを信じ、何も起きなかつた時に次々に亡くなつたエピソードが語られていた。この本が紹介されたのは、高校の授業「宗教」の冬休み前だった。

キヤロルを久しぶりに歌うと、小学校から高校まで通つた

カトリックの学校時代を思い出す。思えば、そこから遠くに来てしまつた。好奇心から、知恵の実を食べて、神の元を離

れたかのように。(教会の Carol の礼拝は、この創世記の逸話の朗読から始まる。)私は知りたかった。外の世界で生きたかった。行動したかった。

二〇二五年、私にとって長年の夢だつた海外大学院での生活を始め、居心地の良い場を離れた。

「私たちはさまざまやりかたで、人生を意味のあるものにできます。活動することによって、また愛することによって、そして最後に苦惱することによってです。苦惱することによってというのは、(略)制約に対してどのような態度を取り、どうふるまうか、そうした制約をうけた苦惱をどう引き受けけるか、こうしたすべての点で、価値を実現することができるからです。」(ヴィクトール・フランクル『それでも人生にイエスと言つ』)

振り返れば、この一年間は、活動し、愛し、苦惱し、いつのまにか人生に対しその意味を答えてきた。そして、次に向かうために、私は知ることを、自分の身体を持つて理解することを、そしてそれを他者に向けて還元することを、真剣に悩み続けることを引き受けなければならぬ。

そうしているうちに、ひとつ歳をとる二〇二六年一月。

## あきの素生

(くうねるめがね)

あつた。

二学期に入り学校生活に戻つてみると、友人が二人、てんでばらばらに同じ沼に落ちていた。そういうの、すぐに「運命」とか思つてしまふお年頃だったので、推しへの気持ちは燃えに燃え上がり、三人で研究したり共有したりしながら、さらなる深みにはまっていった。

推しに会いに行つた。端的に言えば、好きなアーティストのライブに行つたのである。改めて数えてみると、最後に生身の推しに会つてから、四半世紀強が過ぎていた。それで「推し」と呼べるのか甚だ疑問といった有様ではあるが、推し方は人それぞれということでひとつ、と誰にともなく言い訳をして、「推し」としたいと思う。

推しを推し始めたのは夏休みだった。それまでも存在を知つてはいたが、特に関心を持たなかつた。好きでも嫌いでもない。自分に関わりのある分野の事柄とは微塵も思はずにいた。それなのに、ある日たまたま目にした映像がすべてを変えた。当時はもちろん、「推し」という言葉も、「沼に落ちる」という言葉が慣用句としての作用を持つこともなかつたわけだが、振り返つてみると、あのとき自分が推そうが推すまいが、推しは推され続け、その活躍は常に私の気持ちを明るくしてくれた。もはや推しは、私の中の殿堂みたいな場所に入つてしまつているのだと思つた。だから推しは、やはり推しなのだった。

そんな推しと久しぶりに会う。こんな機会はもうないかもしれない。後悔のないように、十全ではないながらもぼーっと沼に落ちたのだ。その後、短い期間で推しへの執着を深め、夏休みが終わる頃には一端のファン気取りで

推しを推し始めたのは夏休みだった。それまでも存在を知つてはいたが、特に関心を持たなかつた。好きでも嫌いでもない。自分に関わりのある分野の事柄とは微塵も思はずにいた。それなのに、ある日たまたま目にした映像がすべてを変えた。当時はもちろん、「推し」という言葉も、「沼に落ちる」という言葉が慣用句としての作用を持つこともなかつたわけだが、振り返つてみると、あのとき自分が推すまいが、推しは推され続け、その活躍は常に私の気持ちを明るくしてくれた。もはや推しは、私の中の殿堂みたいな場所に入つてしまつているのだと思つた。だから推しは、やはり推しなのだった。

そんな推しと久しぶりに会う。こんな機会はもうないかもしれない。後悔のないように、十全ではないながらもぼーっと沼に落ちたのだ。その後、短い期間で推しへの執着を深め、夏休みが終わる頃には一端のファン気取りで

つりぱつりと情報のアップデートなどしつつ、当日を迎えた。

当日は高揚した気持ちでありながら、本番が始まる前からややナーバスだった。始まってしまえば、あつという間に終わってしまう。その予感は確信でもあった。始まらないと嫌だけど、終わるのも嫌だ。これはジェットコースターに乗る前の気持ちと一緒に思った。私はこれから二時間強のジェットコースターに乗るのだ。そんな詮無いことを考えて、(効果のほどはさておき) 気を紛らわした。また、準備不足であることも気になつた。「後悔のないよう」とか言いつつ、早くも後悔していた。

そんな状態なので、あまり食欲がわからない。朝食はほどほど、昼食の時間になつてもお腹が空かず、夕方からのライブに向けてがつんと食べるといった気分ではなかつた。

会場の隣には大型ショッピングセンターがあり、当然のことく、開場を待つ同好の士であふれていた。水分やちょっとした食料を調達しようと食品売り場に足を踏み入れたが、やはり食指が動かない。日頃あれほど間食しているのに、これは重症だと自覚した。とはいゝ、エネルギー不足で本

番を楽しみ切れないなんて事態は避けたいため、なんとかおやつを選び、レジを待つ長い列に並んだ。少しづつレジに近づいていくと、レジ前の商品棚に、「推し活をサポート!」といつた謳い文句で、栄養ドリンクやサプリメントが置かれていた。うまいな、と心の中で小さくうなつた。そして、並んでいる商品の中に、ハウチ袋入りの栄養補給用ゼリーを見つけた。袋から飛び出している飲み口から吸い込んで摂取するタイプのゼリーで、カロリーやビタミン等、目的別に取りたい栄養を選ぶことができる。これだ、と思った。食欲はないけど、水分だけだと心もとない。負担感なく食べられ、ある程度お腹にたまり、そしておいしい。このわがままな気持ちに応えてくれる食べものが、ここにあつた。思えば、広告しながら、スポーツの合間、体調が優れないとき、タイトなスケジュールで食事の時間がとれないときなどに支えてもらつてきた。一も二もなく力ロリー補給用のゼリーを選び取り、レジかごに入れた。ショッピングセンターの戦略にも感謝しながら。

再会した推しは、最高だった。想像どおり、ライブはあつという間に終わつたが、後悔はなく、高揚だけが残つた。この栄養でもつと遠くまで行ける気がする。

・編集後記：



ドラマメリヤ（座敷わらし）



定有堂教室 「読む会」 （講師 岩田直樹氏）

定有堂教室 「ドルーズを読む会」

定有堂教室 「読書室ビオトープ」

それぞれ会場は とりぎん（県民）文化会館

会場 麒麟スクエア（市役所二階 水曜夜・土曜昼）

ドラマメリヤ（編集長）

今年は定有堂教室葉香クラブに新しく参加される方が増え、賑やかな一年でした。長く続けてくださっている方もニューフェイスの方も、来年またよろしくお願いします。

出不精の家虫ですが、少し遠出をするのも樂しかったです。

個人的なこととしては、手話をまた勉強したりました。

皆さま、新しい年もよろしくお願いします。

- ・定有堂教室と太極拳の詳細は下記の、QRコード参照
- （@ドラマメリヤ）



『音信不通』紙版の置き場

- ・県立図書館2階パンフコーナー
- ・エスキース（倉吉）・森の生活者・郡郵堂・
- ・SHEEPSHEEP BOOKS（定有堂ビル2階）
- ・定有堂ビル2階「音信不通」編集部



「奈良は終わった」と言つたのは、二十年前だろうか。十年前から「本屋が読書に追い越される」と言いはじめた。それから十年、「本屋」は終わり「読書」が残った。本屋の本は消え失せたが、読書の痕跡の本は増え続ける。でも、もう棚を作るための本ではない。棚は空間的なものだ。読書の痕跡は時間的なものだ。読書には初発衝動がある。

あふれる本の中で口を失つてはいけないとと思う。それは初発衝動へと立ち返るところなのだ。「終わった奈良」という言葉がふと思ひ浮かぶ。何度も立ち返る。二〇一六年の抱負をそんなふうに考える。

奈良敏行（発行人）